☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ、
☆プロレタリア世界革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！
共産主義者同盟

3月13日
週刊
第215号
編集発行人　鹿島　昌
一部　20円
購読料　20回500円（〒共）

# 戦旗

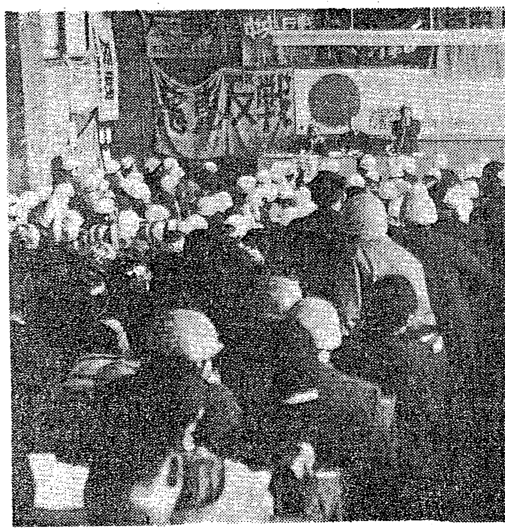
戦旗社
東京都千代田区三崎町2ー7ー6清沢ビル内電話代表03（294）2961 振替 東京 23110
大阪支局大阪市都島区都島中通り3ー7ー16
電話 06（921）1457
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町126ー29（075）（701）0025
名古屋支局 501（732）3553

3月18日　全関西統一行動
（大手前公園　午後6時）
19〜22日　社学同全国合宿
22日　信太山基地撤去闘争
（博本駅　1時結集）
25日　反帝戦線全関西結成大会

# 4・28安保　沖縄闘争へ全戦線が胎動！

## 七〇年代武装闘争へ意志統一

### 2・28〜3・1全国青年労働者討論集会で



全国青年労働者討論集会（第10分科会）

二・二七関東地区反戦共闘会議主催の「安保・沖縄・春闘関東地区反戦労働者総決起集会」と二・二八〜三・一全国反戦代表者会議主催による「安保・沖縄・春闘全国反戦労働者討論集会」は、六九年安保決戦を全戦線の最先頭で闘いぬいた反戦青年委員会に結集する労働者の結集をもって成功的的に勝ち獲られた。

二・二七集会の位置は関東レベルにおける反戦青年委員会の運動を担って来た赤ヘルに結集する戦闘的労働者が、反戦青年委員会の組織的登場以降の全活動を総括しぬき、本格的権力闘争に突入した現段階の階級闘争を、恒常的武装闘争としていかに闘いぬくかが問われ、そのことは従来の反戦青年委員会運動の組織論的弱点をも同時にのり越えるべきものとしてあった。

六〇年安保敗北以降日本帝国主義者の軍事外交路線＝侵略、反革命と帝国主義的国内再編攻撃の中で、六四〜六五年を境とする日本型労働組合主義の破産は民間、社会党、総評のよって立つべき基盤を根底からつき崩して来た。

我々は従来の労働運動の非政治主義的、ボス交路線に対し、労働運動内部に具体的リアルな政治を持ち込み、日韓闘争以降の一時の混迷状況を脱し、砂川、羽田、エンプラ、王子、三里塚の現地実力闘争を貫徹して来た。特に10・8羽田闘争以降、全学連の学生諸君の先行的闘いに呼応し、そして何よりも権力、資本の絶えざる攻撃の中にあって戦線の量的拡大を獲得して来た。そして何よりも我々が我々の反戦青年委員会運動の中で確認し、今後より一層発展させねばならない労働者階級自らの力による武装闘争の開始であった。

### 武装闘争切り拓いた地区反戦

戦後日本労働運動は幾多の権力との激しい攻防を通して、近くは六十年三池闘争、あるいは国鉄、鉄鋼等々で本格的な権力、資本との激しい闘いを展開して来た。しかしながら戦後日本帝国主義の敗北以降、幾多経験して来た労働者階級の武装は、労働者自らの組織であるべき労働組合自らの手で武装解除されて来た。それは無論権力・資本の一致した攻撃が労働組合をしてそれに屈服してきたことを意味するが、そこに代表され、あるいは反合理化、賃上げ等さまざまな闘いの中で体現されて来たような民同による資本との安全弁的役割りは、日本帝国主義の本格的組合とりつぶし策動、あるいは昨今、特に今年に入って本格化した帝国主義的労働運動の開始は民同そのものの存在すら脅威させる道を開始し、もはや労働者大衆からの支持も急速に失いつつある。

六五年日韓条約締結によって具体的に海外侵略を開始した日本帝国主義は、六九年秋の佐藤訪米による「日米共同声明」に端的に示されているように、そして立川基地を先頭として在日米軍基地の自衛隊移管が進行し、沖縄米軍基地ですら、既に自衛隊使用→自衛隊移管が明確なスケジュールにのぼっているように、今やアメリカ帝国主義のベトナムでの敗北的状況から防衛線の南太平洋への後退に変って、日本帝国主義の経済的東南アジア支配から軍事的支配への移行を鮮明にして来た。この反革命軍事外交路線に見合った帝国主義的国内再編攻撃は、運輸、輸送部門における一大合理化攻撃を始め、各部門での合理化、実質的賃下げ攻撃として具体化して来た。国内における帝国主義的国内再編の攻撃は、職場末端における資本の意図を鮮明にさせ、六九年段階における幾多の職場内闘争でも権力の闘争への直接的介入を常態化した。この事実は何よりも日本帝国主義が一〇・八以降の戦闘的闘いに恐怖した結果であり、もはや権力の介入なしに事を解決する手を持たない帝国主義者の予見的末路であることも事実である。このことは本格的にわれわれが帝国主義者と対決し、これを打ち破る路線をも明確に教示している。

従来の企業別、産業別団結形態をこえた地区反戦運動の展開であり、一方この形態をささえるべき地区反戦の大衆的再生である。

### 右派・人民戦線派との反戦の闘い

10・8闘争以降の国家権力との先端における闘いは一方で帝国主義者の意図を受けた帝国主義的労働運動＝民労協・JC、同盟、総評右派の台頭を本格化し今や右派の路線は「アジアにおける生産性向上と自主防衛」という帝国主義者の路線と寸分違わぬ路線となって顕在化している。さらに我々は、この右派路線とは一線を画しながらも、あらゆる闘争を議会主義的に従属し、どっぷりと体制派にのめり込んだ人民戦線派をも生み出している。昨年秋の衆議院総選挙における社会党の壊滅的後退は民同の全面的崩壊状況をも暴露し、人民戦線派のイニシアチブは早晩日共へ移行することが明確になりつつある。日共は昨年の大学闘争で明らかになった如く、今や権力の尖兵として革命派に対峙し、彼等の路線は民主連合政府によって人民戦線内閣の成立を計ることに示されるように全くの議会主義党派としてのみ権力に容認され得る党派への転落である。このように我々を一方の軸とする日本階級闘争の二分解は、我々の位置方向を鮮明にしている。我々が二日間の集会の中でまず第一に確認しなければならないのは第一点に以上の内容であった。この両各職場段階では心情的反戦シンパをも含めて広範な反戦青年委員会に結集する活動家を創り上げて来た。しかしながらこの広範に存在する活動家層に対して従来鮮明な方針を提起し得ていたとは言い切れない。我々は以上の点をふまえて本格的権力闘争の開始である70年代に従来の闘争の質を堅持しながらいかに大衆組織としての地区反戦を大衆的に確立するかに取り組んで来た。その第一歩が「関東地区反戦共闘会議」の発足であり、組織的登場であった。従来の革命派内部でみられるように各階層間の戦線の統一を固定化することによって自らの位置をせばめて来た路線を止揚し、更に労働者階級に領導され得る重層的反戦青年委員会の確立と発展こそ、我々が4・28闘争を始めとする70年闘争の中で追求しなければならない路線である。2・27集会はその第一歩であり、当初意図した圧倒的大衆の結集には残念ながら至らなかった我々の準備過程の自己批判をも含めて以降の運動の先頭に立つことが参加者二百五十名全員で確認された。

2・28〜3・1に至る全国反戦の全体集会・産別集会の圧倒的全国結集は、次のようなブルジョワジーの対応を背でも成功的に勝ち獲られた。今春闘は総評路線の破綻的後退局面はありながらも、安保沖縄闘争の問題の中で一つの大きなエポックを為すものである。ブルジョワジーは従来通り今春闘の対策は第一に民青の動向に焦点を当てて来たが、二日間の討論集会に結集した反戦派労働者に恐怖し民青第一から反戦対策第一におきかえ二月十一日には熱海で主要民間産業四〇社の労務を集めて、本格的反戦パージの攻撃をととのえつつある。我々がこの事実をみても明確な如く、反戦派労働者の力量の増大に見合った方針を要求されていた。集会に対する我々の基調提案は本紙前号において提起したが、我々はこの基調提案にふまえて、大阪中電の発言を冒頭に全面的論争を展開した。

2・28〜3・1集会に対して我々は反革命集団革マル派の集会破壊と全国反戦のデッチ上げ、中核派の十一月決戦勝利→パリケード春闘→六月大政治決戦の無内容性に対して厳しく批判を展開しなければならない。

昨秋の安保政治決戦を全く担い切ることなく戦線から逃亡した革マル派は、全国反戦に対しても敵対し、昨年十二月以降全国反戦から逃亡した。しかしながら二日間の集会破壊を目論む彼等は二月一日教組の集会場へデモをかけ集会破壊を意図すると同時に、あまつさえ、二月二十八日彼等自身の全国反戦なるものを全く大衆的に関知せぬ場所でデッチ上げを行なった。この間の労働戦線内部で全くの第二民同になり下った革マル派は、民同、日共にも勝るとも劣らないしめつけを前労において展開したのみならず、彼等の全国反戦の内実が、実は全面的に協会派とのボス交にもとずいた右派路線であることに象徴的であるように現在の階級闘争に全く耐え得る組織でないことに明瞭である。現在の階級闘争の性格を見ぬけず、自己保身とセクト主義にこり固まった革マル派の最後のあがきが、全国反戦のデッチ上げであることを実態をもって彼等につきつける必要があるだろう。

### 反帝派内部の党派闘争の推進を

中核派は3・1産別討論において端的に示されるように彼等の路線がもはや大衆的には何ら有効性がないことが鮮明になったであろう。「沖縄奪還」をかかげるスローガンに端的に示されているように、彼等の奇妙な帝国主義論は、急ピッチで進む帝国主義の侵略・反革命に対応出来ず、人民戦線派に落ち込んでいることを証明している。そもそも10〜11月安保決戦を大勝利と総括し「日米共同声明」をまやかしとしてしか把え切れない彼等は、今もって「沖縄奪還」路線に固執している如く、そして10〜11月の大勝利から春闘パリスト論に至っては全く論理を持たない、自己の党派の景気づけでしかない。そのことは今次春闘が始る三月段階に入って、彼等が春闘パリストをなし崩し的に引っ込めているように路線は全くジグザグである。彼等は従来からの「日本的組合主義」に全面的に依拠しつつ、いかに反戦派労働運動を階級闘争の一環として創り上げてゆくかの問題提起がなく、自己の党派に都合の良いように大衆運動を引きまわす路線として現出する。彼等の二日間を通じて行われた主張は、11月闘争の大勝利、春闘パリスト、6月大政治決戦の言葉の列挙であり、職場の既制左翼、資本からの画面攻撃に対して、いかに政治方針化するかの問題意識は全くない。

そして電通部会の中で見られた如く、彼等一流のセクト主義丸出し路線は、他党派からも全くボイコットされた。昨年秋の中電・東電におけるマッセンストの革命的意義を全く理解することはなく、高田馬場路線こそ唯一無二とする路線は急速に白ヘル反戦をして後退させていることに示されるように、職場、街頭の闘いをトータルに把握出来ないことにも証明されているように、そしてそれは何よりも一〇〜十一月闘争を闘った反戦派労働者のレッド・パージ攻撃に対して何ら方針を提起し得ていないように、彼等の大勝利路線は党派的にいくら確認してみても、反戦派労働者は明確に彼等の路線を見ぬいているということを二日間の討議は白日の下にさらした。

社青同解放派の合理化春闘論、ML派のおしかけ春闘論の誤りは論をまたないが、我々は中央権力闘争ーマッセンストの結合による階級的労働運動の確立に向けて、各戦線においてすでに闘いに突入している。

三月〜四月の四・二八へ至る闘争は七〇年代の階級闘争にとって決定的に重要である。安保、全軍労を焦頭にする沖縄、反レパを春闘を結合させ「日米共同声明」の内実たる基地闘争の具体的展開こそ我々反戦派労働運動の任務だ。

最後に階級闘争に何ら具体的責任を持たる赤軍派は三月一日我々の赤ヘル反戦に結集する革命的労働者に対して武装攻撃を加えて来た。反戦労働者の断固たる対応の前に彼等は逃亡したが、彼等の集会破壊と革命的赤ヘル労働者に対する攻撃の反革命性は全く明らかである。この事態に対して全国反戦は赤軍派に対して厳しく自己批判を要求することを決定した。この赤軍派の全く反革命な対応は今後各戦線で粉砕されるであろう。

---

## 恒常的入管体制粉砕を

### 3・5総決起集会（江東公会堂）で確認

三月五日、江東公会堂に満場を埋めつくす労働者・在中外国人・学生を集め入管法粉砕総決起集会がもたれた。

すでにわれわれは戦旗71号でも明らかにしたように昨年四月一日に続く再度の「出入国管理法」案の上提は日本帝国主義の対外戦略とその到達段階、アジア階級闘争の革命的展開という具体的情勢に提示されてなされたものであるが故に日帝は、日帝の侵略・反革命への敵対である日本ーアジア階級闘争のプロレタリア国際主義的連帯を出入国「管理」の強化による分断・阻止に全力を挙げざるを得ないのである。

本集会は昨年よりの三波にわたる最大時二万人以上の全国一斉入管事所への抗議デモ、大村収容所解体闘争の連続的な展開の上に大衆的に入管「法案」粉砕から入管「体制」粉砕へ、永続的な闘争の質を獲得するものとして赤ヘル部隊を先頭にもたれたのである。

集会は帝国主義国内部の民衆が朝鮮人に対して、イタミを感じよう、として作られた「チョッパリの会」や華青闘を始めとして自然発生的に組織された闘争組織を結集し、日帝の抑圧に対して始めて組織的、非妥協的に闘い抜いた「三・一万才革命五十一周年ー三・五入管法阻止総決起集会」としてもたれ中核・MLのセクト的ひきまわしが大衆的に糾弾されつつ、二千の日朝中人民の連帯の内にチョッパリの会による基調報告から開始された。

反帝統一戦線論なき、中核・MLの大衆組織囲い込み→自党派拡大路線に大衆的な糾弾が集中したのは当然であった。

日帝は三月七日「朝日」紙上をかりて出入国管理法案、今国会上提を断念せざるを得ぬ事を表明した。これは韓国民団系のオルグに失敗した事と、六月安保改定への国会情勢、そして我々の闘いの進展、つまり10・8以降、プロ独派が始めてプロレタリア国際主義を現実の階級闘争に登場せしめた事から日帝は後退をよぎなくされていったのである。

具体的に新宿西口広場における華僑青年のハンストに連帯して民衆が官権と対峙 していった事やベ平統（ベトナムに平和と統一を）の三者に対する支援の会活動「平和と民主主義」のベールの中で67年一年間に二千二十八人の中国人、朝鮮人に退去強制が申し渡され、三百二十二人が死刑を含む弾圧の待つ韓国、台湾などに強制送還されているが、そのための施設＝日本のアウシュビッツである大村、横浜収容所解体闘争の日朝中人民の連帯の発展は大衆運動の個別性から全体性の獲得という困難な課題をようやく突破しようとしているのだ。

闘争の初期的段階に規制され、国内ー国際反帝統一戦線の組織形態はいまだ不充分であり現在的にせまられている国内ー国際党派闘争を革命的に展開するために入管法闘争の止揚をしなければならぬ。

このとき、前進（473号）が述べる様に「国会上提の断念」を大勝利ととらえる事は党の大衆指導部への溶解の促進でしかなく大衆の自然発生に対して恒常的な入管「体制」粉砕への視点を欠如しているといえるだろう。

尚、会場でのSSLによる戦旗販売はわずか二〇分で用意の百部を売りつくした事を報告しておく。

---

## 中村君（日大全共闘）虐殺に弾劾の嵐

中村君の遺影を先頭にデモ（三月四日）

日本階級闘争に画期的地平を切り拓いた全共闘運動、その牽引車となった日大全共闘の戦士、中村克己君（商学部二年、二十二歳）が三月二日、右翼テロによって虐殺された。

昨秋安保闘争は、六七年10・8闘争以降のわれわれの総蓄積を問うた苛烈な闘いであり、その敗北の総括を通して、早くも日本階級闘争が（世界）党ー（世界正規）軍統一戦線をもって不滅のプロレタリアの前進を刻印している時まさに日大闘争もそのような質をもって荒々しく大衆的に再登場せんとしている時、権力ー古田ー右翼に残された手段は、活動家へのテロであったのであり、それは既に、これまでも無数に続けられてきたのである。

かかる中で中村君は、恐怖におびえてた右翼テロによって虐殺されたのであり、プロレタリア全人民は、中村君の遺志を受け継ぎ、あくなき勝利への執念をもって、前進しなければならない。

虐殺抗議の嵐は、この勝利への執念に転化し、右翼ー古田ー権力をおびやかし、眠られぬ夜を創り出さざるにはおかないであろう。

既に、日大、三月二日・四日と虐殺抗議集会が開かれ、十一日には人民葬が大衆的に取り組まれた。

（詳細次号）

---

## 各務原第二派闘争に決起

### 中・高校生も隊列に加えて

【名古屋支局】全国の先進的労働者、学生、農民、市民 諸君！「戦旗」読者諸君！とりわけ、昨秋安保決戦を最後まで闘い抜き、現在、70年、70年代階級闘争を主体的に荷うべく、全ゆる領域における「党の革命」を闘い抜いている革命的同志諸君！

われわれは2月8日の第一次現地闘争（戦旗71号参照）に引続き各務原闘争実行委主催「3・1各務原ナイキ配備阻止現地第二波闘争」を貫徹したことを報告する。

名鉄新那加駅近くの八幡神社において午後1時すぎより決起集会がもたれ、時折り小雪がちらつき肌寒い風が吹く中を結集した一五〇の部隊をもって集会が開始された。

動員数の1/3を保 証した わが反帝戦線および東海地区反戦からのそれぞれの赤ヘル代表の力強い連帯の挨拶を圧倒的に確認した。

わが赤ヘル代表の述べる、世界革命戦争を切拓く党的主体の確立に向けた恒常的武装闘争の必要性と、それを組織的、実体的に保障するものとしての正規軍ー地区反軍ー反帝戦線建設の意義を全く理解出来ずに、われわ れに対する矮小なそれこそ矮小な ケチつけしかできないブロ学同の代表の発言は、昨秋安保決戦の無惨な敗北を何ら総括出来ていないことを自己暴露したのである。正しく「武装」を巡る総括が欠落しているのである。

地元の反戦団体の代表が決意表明を行なう。前回の各務原闘争のデモに参加したというただそれだけの理由で退学させられた女子高校生がいると怒りをこめて発言するや、集会参加者から一斉に弾劾の声が発せられた。

この集会にはあらたに7名の中学生が参加している事が報告される。中学生代表が発言に立つや、簡単ながら力強い決意表明は万雷の拍手と声援をもって確認されたのである。

決起集会後、3時過ぎからデモに移り、わが赤ヘル軍団＝反帝戦線を先頭部隊としてブロ学同、解放戦線、日中正統、地区反戦、ベ平連の隊列が続く。当日の卒業式粉砕闘争のため決起集会には参加できなかった高安闘委の赤ヘル部隊を途中から加えてデモンストレーションは圧倒的なジグザグデモうず巻デモを交えながら自衛隊基地に向けて進む。あたりは「安保粉砕！ナイキ阻止！」のシュプレヒコールと笛の音で一杯になり、機動隊指揮車からの「ブタのわめき声」もかき消された。沿道では数百の市民が見守る。国道に出てしばらくすると官憲はついに恐怖の絶頂に達し、我々に対する憎悪をむき出しにして道路の両側からデモ隊に襲いかかり、なぐる、けるひっぱるのあらん限りの暴行を働き2名を不当逮捕し我々の隊列から連れ去った。我々は弾圧にもめげず、基地正門前での抗議集会を断固貫徹し、国鉄那加駅へ向かった。駅前における簡単な総括会ののち解散した。

我々は今後も各務原闘争を恒常的に闘い抜き、反動的な市会体の変革をかちとり、地域住民との共闘の下に各務原反帝会基地撤去を目指して闘い抜くであろう。そしてまた、岐大革マルとの党派闘争に勝ち抜く中で我々の拠点を形成するであろう。

---

## 赤ヘル再度最前線へ

### 革マルの集会破壊を粉砕し

【札幌支局】全国の同志諸君！「戦旗」読者諸君！栄光の赤ヘル部隊はこの北海道の地においても不死鳥のごとくに蘇生し、七〇年代階級闘争をマルクス主義の旗の下に牽引・領導する地位を確保するに至ったことを誇りをもって報告する。

昨秋安保決戦の敗北と、北海道においては北大闘争を頂点とする学園闘争の敗北は、残念ながら、一時は全くみるかげもない程に衰弱しきった革マル派 の反動的再生を許す 結果と なってしまった。

彼らは全く反動的にも、かの六〇年安保 敗北 以降の「反スタ主義」の復活を夢見、のさばる仕末であった。

しかし、われわれは、六七年10・8羽田闘争以降の二年有余にわたる「組織された暴力とプロレタリア国際主義」の闘いが、暴力革命の旗を高く掲げながら、何故、「政府打倒」のスローガンを掲げた時に、その内実を形成しえなかったのかという問題の総括の核心をほぼ正確に把握することが出来た。

まず総括されるべきは党の革命理論でありそれに基ずく組織建設が、いかなる円環に停着していたのかということである。

既に昨秋闘争は敗れたとはいえそのような六〇年代階級闘争の限界を突き破るべく準備された闘いであった。

「戦争をはらむ危機」「党ー軍ー統一戦線の立体構造の創出」等がそのような内容であり、それらを綱領へと高める一切の理論的作業をもって、われわれは、七〇年代階級闘争を領導する革命党建設へ昨秋段階から着手していた。

唯一、北海道の地においてのみ革マル派の反動的再生がなされるという否定的現実は、既にこのような作業の遂行のうちに、実は根底的に奈落につき落とされる[illegible]歩でしかなかったのである。

「3・7全道労学市民 政治集会」は、諸党派からなる実行委の下に、反帝統一戦線の再編をもって、革命的左翼が大衆的に登場する展望の機会であり、再建された赤ヘル軍団はその最先頭に立ったのである。

赤ヘル軍団は自治
からの集会に唯一
た。案の定革マル派
おしかけてきた。こ
で、会場使用が断わ
北海学園大に移動。
ここでは、民青、
会破壊のもう一方の
としていた。革マル
名の最大動員をもっ
ガキを試みんとした。
ヘル襲来総二〇名は
集団に突撃を開始し
してしまったのであ
これら、数度の闘
会は、総決起集会に
たとはいえ、北大決
状況を根底的に再編
このようにしてから
ある。

---

## 麻布高校長室占拠！

### 赤ヘル軍団、高校生運動に登場

全国の同志諸君！戦旗読者諸君！我々赤ヘル軍団五名は、2・11紀元節粉砕闘争への権力・当局一体となった圧殺策動をまさに当局の管理者的態度を全大衆の前に暴露するなかで2・21遂に赤ヘルを先頭に黒・灰（ノンセクト）白ヘルなどの部隊を領導し、校長室坐り込みを貫徹した。（常時一〇名以上坐り込み）

闘争経過を若干述べると、我々は2・11闘争統一実行デモを結成し学外デモを計画した。

ところが麻布署に申請に行くと「集会所＝学校の許可がないと認めない」というので校長に許可を求めたところ「政治活動は好ましくない」の一言で圧殺した。

これはまさに校長の拒否を予想した権力の我々に対する直接弾圧であり、また活動家K君に対する個人的侮辱の発言などまさに管理者の許すまじき暴挙である。

さらに2・10以来、個々が当局と統実委共催の全学集会を提起すると当局は「生徒会主催でなければ認めない」などとまさに生徒会＝御用機関のもとに我々の闘争を収拾していこうとするマヌーバをつかっている。

我々は2・21以来連日一週間以上もの間当局に①2・20の統実委主催の集会にでなかったことの自己批判②統実委当局共催の全学集会開催（議題、2・10での校長・某教師の暴言の自己批判・生徒の主体的活動の公認）を要求し赤ヘル・白ヘルで坐り込みを貫徹している。

そし連日ビラマキ、立看、ハンドマイク集会で全大衆の活動化、組織化を獲ちとり、権力・当局の私服高請、反動教師のステッカーはりへの弾圧・全高協（日学同）などのテロ、リンチ、立看破壊、親から「自主退学しろ」等の弾圧などを糾弾、自己批判要求しつつ3・3統実委・当局・生徒会三者共催の全学集会をかちとり当局を弾劾として追求すべく全大衆の闘争主体形成ー階級形成を貫徹している。

そしてわれわれは生徒会運動に埋没し、会則改正＝自治獲得＝ポリダム自治会帰還なる改良主義的方針をもってする一部反戦高連（革マル系）諸君が
民青ー秩序派の「生
動の一環、生徒会と
るものを補完するも
いものとして根底か
ならない。われわれ
学園闘争（中学生も
闘っている）を全大
ン的団結ー権力闘争
ヴイエト型全学評議
主活動規制粉砕！試
式粉砕！をかかげた
構築をもって白ヘル
民主義ー自然発生性
服し全国の反戦、全
連帯し全人民的政治
ていくことを宣言し
ル軍団からの闘争経
の提起にかえたい。

---

## 地裁との非妥協的対決をもて東大統一公判貫徹闘争へ！

共産主義者同盟救対部

東京地裁刑事九部（柏井裁判長）法廷（安田9・19グループ）は去る二月二十三日、東大安田死守へわが社学同の旗のもと、決死的闘いを貫徹した東北学院大茨城大の革命的学友に対し、最高一年八ケ月の欠席・分離求刑を強行した。敵権力はこの欠席分離求刑の上にたって、来る三月十九日、これら革命的同志に対し、分離欠席（実刑）判決の弾圧を予定している。われわれは、これら同志とともに断平として東大応需主義公判＝分離欠席判決粉砕、統一公判要求をもって闘いぬく決意である。

周知のごとく、昨年11・26闘争判決以後、敵権力の大量実刑による応報的弾圧は常態化した。そしてこの嵐の前に東大統一救対と被告団は総体としては解体せしめられ、一定の後退を余儀なくせしめられた。

しかし、これはけっして敵権力を安堵せしめるものとはならなかった。あたかも研えられた銃剣を恐れず一歩一歩とその敵の胸元にせまるような闘いがますますきれだって裁判のなかに組織 されていることによって、敵権力は恐怖の絶頂に立ちどまるか、狂気の弾圧に理性を忘れようと必死になっているのだ。いまや、「体制」のために弾圧があるのではなく、弾圧のためにのみ体制が存在しはじめている。

治安頂上機関＝地裁を媒介として[illegible]は七〇年弾圧に対してのわれわれの闘いの端緒と、その主要な一部を形成するものである。そこでこの闘争は統一救対ー被告団分解を契機とすることによっていまだ本格化したばかりなのである。まさに東大統一公判ー欠席審理・実刑判決をめぐっての統一救対・被告団分解は「裁判闘争主義」の限界と破綻をはっきり明示し、それは一審貫徹のみではなく、二審への中間的対応をも左翼的に是正せしめつつ、我々にとっても苛酷な進展をとげてきたのである。「裁判闘争で弾圧粉砕闘争をやる」路線はいま部分的には残存する裁判＝ブルジョア民主主義闘争における判断機構としての幻想になんとかして右からすがりついていこうとするものであること、しかし、日帝政治委員会の実体はその幻想にはなく、裁判＝治安頂上機関の現実にのみ存在すること、を極めて鮮明にしつつある。

だがそのことによってわれわれが裁判闘争の
要道であるとという批判は笑止千万な批判的批
きない。裁判闘争が裁判闘争におわらず、天幕
獄中闘争が不可避とし、その入口にすぎないよ
代に、法廷にいることだけが自己目的の「裁判
は代々木的合法主義弁論へ自らの政治闘争をま
せばめ、そのことによって「恒常的武装闘争へ
的主体を自ら解体せしめることになっていくの
しろ清算主義は次のかたちで、即ち何とかして

という闘争の路線化として「赤旗」に典型なかたちをとるのである。

われわれはきたる3・19分離欠席判決粉砕闘争に、本格化する東大統一公判闘争 を闘いぬくう。それはもはやたんなる自然発生的戦闘性に依拠した闘いでなく、われわれの党的建設と強固し、それによって保障せしめられた闘争として一人まで貫徹する決意である。

理論戦線
第九号　準備中

# 革命党の飛躍と赤軍派解体に向けて（下）

## 党—軍なき戦闘集団＝赤軍派の解体を党の共産主義運動の組織化を通して更に早めよ

赤軍派との党派闘争は、彼らによる同盟同志社大細胞リンチ事件に対する、われわれの整然かつ断固たる闘いの勝利によって新しい局面をきりひらきつつある。

いうまでもなく、同大リンチ事件は、昨夏の七・六事件の矮小かつ貧しい再演であり、それは、大菩薩峠の敗北と昨秋闘争の総括の過程で、赤軍派にわずかに残っていた革命的なブントの魂が遂に失われたことを意味していた。

そして、わが同盟が、七・六事件の根底的総括の中から、赤軍派への反撃を、内ゲバの論理への拝跪を通してではなく、赤軍派との軍事的対峙に投影された同盟自身の党としての未成熟の止揚をめざし、「人民内部の矛盾の正しい処理」の先行において、何よりも政治的対決をもって臨んだことによって、赤軍派内部に現に進行する腐敗、その「武器の論理」への拝跪は余りにも鮮かに露出したのであった。

もちろん、わが同盟は、自らの党の革命＝党形成が完了したとか、赤軍派との党派闘争に決着がついたとかいう必要はない。ただ、赤軍派との党派闘争が、われわれ自身の党の革命の「環」として、その他の党派とは異なる極めて特殊な位置を占める、そのような時代はほぼ終了しつつあることを確認しておけばよい。

大菩薩峠から山を降りた赤軍派は、あの熔鉱炉の秋に、一介の見物人としてしか存在しえなかったことによって、自らのブントとしての過去の中にわずかながら育まれてきた革命性を最終的にくい尽くし、プロ・スターリニズムに転落した。

再び始められた同盟への物理的敵対は、その象徴的事態にすぎない。

### 「赤軍NO4」にみられる方法論の誤謬

赤軍派がその「革命理論」らしきものを叙述しているのは、唯一「綱領確立のために（Ⅰ）」〈Ⅱは永久に出ないであろう〉と題した「赤軍」NO・4においてである。秋へ向かうにあたって、提出されたこの文章は、その「世界武装プロレタリアート」論に含まれるプロ・スターリニズム的内容にもかかわらず、諸々に散見される党建設への歩みにおいて、わが同盟が九回大会（八月）において獲得した諸内容に部分的に接近し、問題を提起する部分を残しており今日はプロ・スターリニストに転落しつつある彼らの良き記念碑となっている。

この文章は、第一に過渡期世界論を世界史的な階級闘争の展開から位置づけようとすることにおいて、赤軍派結成当時の「帝国主義における侵略と反革命の不統一——プロレタリアートの高次な自然発生性」という客観主義、彼らの「蜂起」を世界革命戦争との関連で規定することにより、「秋にファシズム到来——その前段階に蜂起を」という観念的発想を地上にひきおろそうと試みた点からして一定の前進的萌芽を内包していた。この良質の傾向は特に第四章において比較的多く表現されている。

だが、かかる主観的意図にもかかわらず、その破綻は「第一章、現代革命論の方法的視点」において既に露呈してしまう。

すなわち、「第一に過渡期世界を……史的唯物論上の次元での世界史的階級闘争の到達段階の措定（世界武装プロ・ブルの受動的・防衛的性格とプロの能動的攻撃的性格への転化）。第二に、これに基礎づけられ、媒介されたところの、現代帝国主義—現代帝国主義国家を基軸に、ブルとプロとの闘争関係、ブルの制約—プロの被制約—プロの逆制約（自然発生的）の関係として、現実形態的に過渡期世界を把え、現実形態的にプロレタリアートを把える。……第三に、第一、第二の上にたっての、現状分析において措定された攻防関係とプロの総体としての歴史的場所的位置把握。ここからプロレタリアートとその党の現実形態性に媒介された世界史的プロレタリアート・世界革命・社会主義→共産主義の「成長の在り方」への接近として革命論は獲得されるのである」と（カッコ内引用者）

これをわかり易く、かつ好意的に解釈するならば、以下であろう。

第一は、資本主義の生成、発展没落、死滅の過程とプロレタリアートの世界的階級形成。第二は、現実の国家における支配—被支配の関係にあるブル—プロと、第一の点に規定されたプロの「高次の自然発生性」。第三に、これらを踏まえた現状分析を基礎とした革命論。

だが、これらは、次の点で誤っている。

われわれが革命論構築にあたって明らかにしなければならない第一の点は、史的唯物論、あるいは唯物史観である。これは正しい。だが、これは、ブルとプロの階級闘争それ自体の次元ではなく自然と人間の闘争の次元に関わるものである。それゆえ、われわれがここで明らかにせねばならないのは、プロが能動的になったとかならないとかのお話ではなく、プロ階級それ自体の死滅へ向けて資本主義の生成・発展・没落・死滅を根底において定してき、また規定してゆかねばならないところの、共産主義の党の形成にほかならない。

第二に、それゆえ、プロレタリアートの世界的階級形成の問題もそれが、制約—被制約—逆制約として自己展開し、党がそれに手段として介在するというものではない。それが歴史的に蓄積される唯一の現実の形態こそ、党であり、また階級闘争の外化された形態こそ、ブルジョワ国家形態である。

それゆえ、われわれが敵権力の反革命武装をひき出し闘争すべく味方を武装させるとき、それは、戦場においてひき出された敵権力の形態のうちに、味方の階級闘争の蓄積をその外化された表現において見極め、味方の武装のうちに同時に、階級の死滅をめざす階級的団結—共産主義的党生活—人民内部の矛盾の処理をかちとるためにその前提をもって行うのである。

レーニンの「なにをすべきか」における「計画としての戦術」が「武装蜂起の軍事問題」と「職業党の共産主義的政治」を一つのものとしていたように。「二つの戦術」における「革命的戦術」は、ただこの延長としてのみ存在したように。

また、「帝国主義論」の決定的意義が、それ以前から自明であった「帝国主義戦争→内乱」のテーゼ＝軍事問題の再確認にあるのではなく、むしろ、かかる軍事問題を規定し、それを媒介としてはじめて展開される、より広大な政治としての、労働者階級の組合的成熟と党のその中への溶解＝「第二インターの崩壊」の世界史的克服の展望を「奴隷の言葉」ではあれ明らかにしたことにあるように。

かかる革命論における誤りは、党形成—階級形成の二元論に不可避に導かざるを得ない。

すなわち、第二章においては「プロ革命の自然成長性に対して前衛と党が、目的意識的に、計画的、組織的に、これを成長させるには、個々の党としての闘争において、意識的であるためには、党自身においてプロの自然発生性が別の形態をもって転倒してもちこまれる。前衛自身の党内政治生活の自然成長性として発現することに対して、目的意識的・計画的・組織闘いが党のための闘いとして二重に推進されねばならなかった。すなわち、彼らは、革命の意識的、計画的貫徹を、党としての狭い意味での階級形成＝党としての闘いを担い、プロ革命の媒介体である前衛党自身の、理論的、政治的、組織的な面にわたる強化—建設に貫徹したのであった」と。

これが、レーニン主義的党建設なのだそうだ。だが、かかる党形成におけるその団結の質的規定性を欠いた反映論は、トロツキーの政治力学的分派闘争（トロ選五巻）のそれではあっても、決してレーニンの共有するものでないことは既に明らかである。前衛党は「プロ革命の媒介体」としてまずあるのではなく、共産主義運動の担い手として存在するものであり、敵—味方の軍事に集中された闘いを不断に、味方内部の矛盾の処理＝共産主義的団結の創出のために転用し、このことにより逆に軍事をよりふかく、敵をより近く見定め、解体を進めうるのである。

だが、トロツキーの二番煎じに留まっている限りはまだよい。いまや、それはプロ・スターリズムに変質してしまった。

### プロスタへの転落の開始とその根拠

最新の「赤軍」NO・8はその好例をはしなくも提出してくれている。

（「ゴミ箱の革命」「革命のクズ箱」というこっけいな迄の憎悪に満ちた文章は、現指導部がいまや「ゴミ箱」あさりの左翼ゴキブリ集団＝革マル派まがいの「党風」を「確立」しつつあることを示している。そして、同じ号に「補論」として掲載されているかつての指導部のわが同盟への「自己批判書」がそれなりに未だ相対的に良質な部分を残していた当時のものとして、「人民内部の矛盾の処理」「党内闘争の規準」などに言及していることが、「ゴミ箱ミ」との対比の中で、いかに「反古」同然にみえることか。

かつてかれらが「綱領—党風—軍規」を提起し「内ゲバ・リンチを止揚せよ」と訴えたとき（「赤軍」NO・3）それは「個人的決意の集団」としての彼らの実体からする戦術的優位ともあいまち、またわが同盟が未だ「軍事を組織する党」への根底的革命を経ていなかったことにより、9・5全共闘結成大会におけるわれわれの「軍事的」敗北の一因をも成したのであった。

だが、わが同盟は、10・21の敗北を通して、急速に、党の革命と（軍事）戦略の獲得に向けての活動をおし進めはじめた。他方、赤軍派は、大菩薩峠の敗北（11・5）以降、かっての良質な傾向とわが同盟との双方を「蜂起ぬきの戦争主義」として否定し、かねて存在していたプロ・スターリニズムの純化へ、「赤軍」NO・5をもって踏み出したのであった。

「我々の敗北の教訓」とし「赤軍」NO・5・6にまとめられた内容は何か。それは一口でいうならば「戦争（とその戦略）ぬきの蜂起主義」である。それは戦争を「決定」しない）種々の物質的諸条件（国際根拠地、銃火器、国際地下組織など）をあれこれと並びたてながら、戦略の主体（党に組織された人民（＝党・軍・統一戦線）についてはなんら言及しない、という、あのスターリンによる軍事学説の再版に他ならない。

「世界党—世界赤軍のヘゲモニーがないままに、過渡期世界において「勝利」した「革命」が「前段階武装蜂起」→「武装根拠地」（殆んど外国に於て）→「労働者国家の客観的根拠地化」をもってあった」（「赤軍」NO・7）という歴史の捏つ造を行ないつつ。しかも、こていねいにも、この三要素の結合は「無自覚ではあれ、自然発生的であれ、そしてゆがめられはすれ、確実に結合して」と注釈をつけるというコッケイさで。だが「B・中核・MLの一国革命論者がこの歴史的事実をみていない。だから蜂起もできないのである」とまで錯覚しているのだとすれば、敢えて黙殺するわけにもゆくまい。彼らが清算しはじめた、自身の過去の左翼的純朴さのためにも。

### 党・軍の形成の方法と蜂起の関連

第一に、「世界党—世界赤軍のヘゲモニー」いまやこれは「国際的分派闘争にのりだす＝外国にゆくことから始める」という組織術主義的空文句のお飾りとなってしまっている。あの綱領問題提起のときから更に後退し、尤も「党形成」を「プロ革命の媒介体」としか規定しない利用主義は一貫しているが。

「世界党—世界赤軍のヘゲモニー」それは単なるお説教に堕落させられてはならない。現実に世界プロ独以前において世界革命戦争の戦場が多く分散しているとき、ここ、日本の戦場においても「世界党・世界赤軍のヘゲモニー」を形成しない限り、実体的にも実現しえないし、またこのことは勿論困難だが可能なのである。それはわれわれが全くの裸一貫から出発するのではなく、第一次大戦とロシア革命の迂余曲折した、しかし着実な展開のうちに成長転化していった党・軍・統一戦線の体系が敵階級の反革命軍事体系の再編運動の中に刻印されており、この攻防は（正しい戦略に導かれる限り）われわれの党形成の中に、ロシアボリシェヴィキ、中国共産党それを止揚した共産主義的政治として一体的に対象化しうる性格のものだからである。

反革命軍事体系は、世界革命戦争が、都市（ヨーロッパ）から、農村（アジア・三大陸）へ移行、定着する過程で形成された。それゆえ、ベトナムにおけるエスカレーションの解体を契機に再び都市（帝国主義諸国）を襲った新たな波は、単なる舞い戻りとしてではない。たとえその担い手（反帝統一戦線）が自己に無自覚であったにせよ、それは、既にその歴史的過去において敵によって解体させてきた、プロの組合主義・農民の無政府主義、植民地人民の民族主義などの党形成を通した解体を集中的に行い、そうした解体を伴うものとして以外には、軍を従って統一戦線の再編の展望を組織することが全く不可能であることをわれわれにつきつけるのである。逆にまた、かかる敵権力による強制に対して、われわれの最大の武器は、軍に集中的に体現されるこのような共産主義的生活の生産であり、戦略より規定される軍事の指揮系統、班編成がこれに裏づけられることによってのみ軍事的にも不敗の軍を建設することができるという時代を迎えているのである。

第二に「前段階武装蜂起」。大菩薩の戦士を抜きとられた後の形骸と化した赤軍派のそれは、いまや、今秋のために、四・六月を「平和デモで抑えきる」という日和見主義の純化に至っている。それがロシア一七年のアナロジーに過ぎないこと。だが、ロシアが帝国主義軍隊の解体の中での革命と反革命の武装＝戦争をめぐる実体的対峙＝相互強化の上に、メンシェヴィキ多数派ものっかっていたそれに対して、今日の日本では、自衛隊が核均衡戦略にくみこまれ政治的恫喝を強化しながら実態的な前線部隊は警察機動隊となっており、殺害の代りに大量逮捕、長期拘留、実刑判決でそれと同質の効果（政治的武装解除による軍事的武装解除）を狙っているという関係の中で、われわれの戦術はまさに赤軍派と全く反対に立てられねばならないことが明白である。反革命軍事体系、その一翼としての自衛隊が核の恐怖の均衡をもって、プロレタリアートの政治的分裂による軍事的武装解除をめざすのに対し、反革命軍事体系の全領域の解体をめざす軍事闘争において着実に機動隊の種々の単位の部隊を兵力集中で武装解除をくりかえし、この遊撃戦の統合、発展を媒介するものとして、現時点における自衛隊、機動隊の政治的統轄者としての帝国主義政府に対する中央権力闘争を展開することである。

この軍事闘争の継続を通して、反革命軍事体系の全領域を機動隊により武装させ、味方に核の恫喝にもかかわらず反革命軍事体系を軍事的に解体できる政治的確信を与え、武装勢力として定着せねばならない。

われわれは、戦争の防禦—対峙—反攻のそれぞれの区切りにおける数多くの「飛躍」としての総攻撃を否定しないし、それを「蜂起」と呼んでも悪くはないと考える。だが、赤軍派の「前段階武装蜂起」なるものは、その前に戦略とは無縁なもでである。しかも「政府中枢機構の占拠、解体」をその戦術的中心環にするという60年代型平合法主義の裏返しを含め設定して、それから部隊をつくるなど、まったく、党・軍なき戦闘組織にふさわしいやり方である。

第三に、「国際根拠地」と蜂起の軍隊」におけるプロ・スターリニズムの純化。

「前段階蜂起として突き進んだ蜂起＝革命を維持し、発展させるには、だから、内戦を、労働者国家における武装根拠地からの政治的、軍事的支援（物資・兵器・兵員・国際義勇軍・将校・作戦総合司令部の獲得ETC）」（「赤軍」NO・5）革命戦争における「自力更生」は決して、民族主義でも、一国主義でもなく、世界革命戦争が、世界プロ独を通して、共産主義社会をきりひらく途にいたる根本問題としてある。そしてこの根本問題が解決されつつ、戦場がアジア、アラブ、中南米において結合をはじめているのであって、その逆ではない。朝鮮戦争の場合もそうであった。それらは、何よりも党の作風や軍規における接近を媒介としていたのである。

こうしたことは、昨夏の国際反帝会議の半ばの挫折の総括をもってしても明白である。

であるならば、われわれにとって戦闘宣言や共同行動・国際協議会等の活動の他に、60万人の在日朝鮮人民の組織化は、党形成の上でも、また戦略的にも、極めて苦しいが、最もなすべきことである。これについては別の機会に）

「蜂起の軍隊建設の鍵は第一に武器の入手と訓練……第二に……来春闘争を平和デモ……第三に、学生……大挙して自衛隊に入隊させ……第四に全国に…革命戦線準備委員会……蜂起の兵站部……武器、財源、兵舎の確保、中央軍の予備兵形成・蜂起に向けての地区軍、軍事訓練を全ゆる地区住民に……」（「赤軍」NO7）

軍建設が「武器」から始まっていること。「（武装蜂起）には絶対に不可欠な銃火器等の使用—訓練による敵の計画的せん滅が必要である。ところで敵の計画的せん滅はとりも直さず、敵の味方への全滅計画を政治的に宣言せしむることであり、勝つ以外には生への展望はありえないのである」「赤軍」NO5）

すなわち、スターリニズムやブルジョワ軍事学と同じ「武器による決定」の論理である。

われわれは次のように考える。武器は生産を基本にする。奪取はその次、以下、もらいうけ、購買となるが、これらはあくまで副次的手段でなければならない。更に次のように考える。

### 党－軍－統一戦線の関連なき組織論

武器がひとりで戦局を決定することは全くありえない。武器は、それに党の成長（党・軍・統一戦線）が血となり、肉となっている限りにおいて、正しい戦略に導かれるならば、その通常の用法を超えて使用しうる。解放戦線は、銃で戦闘機を正確に射落とすのである。

「銃火器による敵の計画的せん滅」を企てたからといって、それ自体で自衛隊をひき出し両階級が戦場でせん滅しあう攻防関係をつくり出すことはありえない。「武器による決定」への追随は、たかだか、味方に対する大量逮捕、長期拘留、実刑判決の更なる擬的エスカレートと、その一環としての戦場ではなく、裁判を通した肉体的死の可能性がひらかれているのみである。

したがってまた、反革命軍事体系解体—機動隊せん滅、統合機としての中権—マッセンストの構造を切り離された、かかる「前段階蜂起」と「結合」して自衛隊入隊運動をやっても、全く「帝国主義解体—赤軍」の展望は出てこないのである。

次に「革命戦線」が兵站部・地区軍であるとする考えについて党・軍・革命戦線というダルマ落とし的構造の中では三つの部分のいずれもが相互の緊張とその止揚の関係を欠落させ、タコツボ型の偏狭な組織になってしまう。

「前段階蜂起の貫徹のために」という観念のために、階級的現実に盲目になってしまった結果がこれである。

われわれが提起している「反帝戦線」は、党、軍との緊張関係を保ち、その止揚の媒介を❶地区党軍事委員会、❷「新しい共青」において見出している点で決定的に異なっている。

すなわち、赤軍派にあっては、❶は単に、軍（正規軍）への供給ポンプとしてしか位置づけられていず、「軍が〝大衆の前にカッコ良く登場」（「赤軍」NO6）してくれることによって地区党の組織活動が保障されることを願うという構造である。

❷に至っては、「大衆闘争の頂点での軍事闘争の展開ではなく、大衆闘争から全く分離した地点から世界革命戦争→蜂起の外国根拠地建設と結合した軍隊によってまず蜂起が開始されねばならない……党派の軍団として中間組織（先進的活動家集団）という一般性、中途半端性での階級形成、分離はなしえなくなった」（「赤軍」NO6）として消滅してしまっている。

これがなぜ誤りで、❶❷がなぜ必要なのか。

❶の任務は軍（正規軍）の全的分担、戦闘に対する中央と結合した指揮のみならず、反帝戦線の形成、その軍との共同戦闘の指導訓練などを担うものとしてあり「兵站部」等の「諸機能」はまさにかかる党活動に媒介されることによってのみより有効に組織されるのである。

赤軍派の場合は「革命戦線」を「権力機関」と称しておだて上げているが、それがどのようにしてそうなるのか、全く明らかにせず実体的にはただただ、旧来の闘い込み組織をカンパ組織にしたといった構造をぬけきれず、相も変らぬ学習会と排外主義的他党派解体運動に血道を上げているのが現状である。

われわれは、「反帝戦線」を権力機関に高めるべく建設するが、それは、実体的にも、赤軍派の戦略ぬきの「政府中枢占拠・解体」戦術ではなく、反革命軍事体系解体—機動隊せん滅、統合機としての中権—マッセンストを通じた全国のわが同盟の党活動の下に準援されている主要都市への軍の出動分散と「反帝戦線」との立体的共同戦闘を以って着手するのである。それゆえ、かかる戦略において「反帝戦線」は不可欠な媒体にある。また「反帝戦線」をかかる戦略にくりこむことにおいてのみ自律的戦闘、指揮系統も確立しうるのである。「反帝戦線」が欠如しているとき、軍は、打って一丸となっての鈍重な戦闘はできても集中—分散の機動性に欠け、また軍の隊、班に至る小部分における自律的活動を営めず、絶対的水平主義を生み出し、単なる党派軍団に転落する。

❷の任務は、なによりも単なる「党派軍団」としてあるのではなく、従来の共青同、社学同の階層別分断、個別職場、大学に規定された「先進的集団」としての構造を、両者の組織的実体を「軍事組織」として確立し、それが要求する民主的中央集権を媒介としたより広い政治を体現し、共産主義に向けた全人民の組織化を「反帝戦線」として実現し、その中核となるべき「新しい共青」として建設されつつある。「反帝戦線」はこの「広い」政治をぬきにしては建設されない。また「反帝戦線」が広ければ広いほど、それは「共青」の政治の質を問い「政治」が狭いとき、不可避に軍事的現実的解決を求めて噴出しようとするが故に「反帝戦線」は何よりもあの中国文革において「紅衛兵運動」として萌芽的に示された革命的人民の共産主義へ向けて、不断の党の革命を推進する形態に他ならない。

以上、❶・❷の欠けた「革命戦線」は、全く糸の切れたタコのようなものでしかない。また赤軍派が、「革命戦線」に対し、かく「利用主義的」に対応するかぎり「軍」それ自体は、この構造に甘え、党の傭兵に転落するであろうそして、党そのもののプロ・スターリニズムへの必然的堕落。

赤軍にもしまだ、革命へのあくなき献身性と、冷徹な洞察力を併せそなえたブントの旧同志が残っているとすれば、「ゴミ箱の革命」「革命のクズ箱」という荒廃した文章をそのまま、自らの姿の投影としておののかないことがあろうか。

---

# 社学同の組織総括と飛躍の課題（5）

# 共産主義運動—軍団建設を媒介に
# 社学同は共青への飛躍をかちとれ

共産主義者同盟中央学生組織委員会

### 昨秋闘争総括のまとめにかえて

69年10—11月闘争の総括の中で解明されなくてはならない第一点は、現代帝国主義なんずく日本帝国主義国家権力の性格である。この権力の特徴は、69年4・28闘争の中でほぼ原型が示されていたけれども、大学立法による5—10月の大学拠点破壊を経て、10・21闘争に至って完成したものとしてあらわれた。すなわち結論的に言えば国際反革命同盟の自国帝国主義軍隊の強化を軸にした再編、及びこれと結合したところの戦後議会制の金融資本—帝国主義軍隊—官僚機構—帝国主義的労働組合を軸にした再編成は、国際反革命同盟—戦後議会制の枠を維持しながらの侵略・反革命の強化としての再編成であるがゆえに、古典的な排外主義の形成が困難であり、大衆の政治的統合に弱点を持たざるをえない。親米反共としてのブルジョワ政治委員会の政治展開は、その内部に反米反共派、反米親共派を形成しつつも、帝国主義軍隊—治安警察・機動隊として暴力装置を前面に押し出した支配としてその政治を貫徹しようとするのである。自衛隊の治安出動訓練の強化とその公然たる報道、機動隊による首都—大阪の一日の制圧、銀行・商社・交通機関との結合、自警団の組織化、大学拠点のロックアウトは、自衛隊・機動隊のブルジョワ私兵として性格がより鮮明になりつつ、肥大した反革命部隊として強化されていく傾向をはっきりと示したのである。この権力の性格は、国際反革命同盟を維持し再編しつつ不均等発展を遂げていかざるをえない、現代帝国主義の運動から結果するのである。

総括の第二は、中央権力闘争—マッセンスト、恒常的武装闘争、内戦＝世界革命戦争の関連である。10・21—11・17闘争における権力の攻撃は、従来のごとく日と場所を定め大衆闘争の極限として組織されてきた中央権力闘争とマッセンストを壁に突き当らせた。恒常的武装闘争は❶帝国主義の侵略・反革命体制・軍事体系の再編に対する破壊戦❷全国政治闘争における大衆武装の促進と機動隊粉砕の闘い❸拠点闘争、マッセンストにおける大衆武装の促進と機動隊粉砕の闘いとして、従来の中央権力闘争とマッセンストのより計画的かつ、レベルアップした組織化をも含みつつ、帝国主義軍隊—治安警察・機動隊を軸にした侵略反革命体制の構築を計画的に粉砕し、せん滅していく持久戦の陣型を形成することである。10・21闘争の敗北の痛苦の総括の中から、我々が「機動隊せん滅」のスローガンを掲げ、羽田闘争として攻撃阻止闘争へ傾斜しようとする闘いの中に恒常的武装闘争の刻印を押すべく11・16闘争を闘ったことによって、階級闘争は革命主体の転換の完成を要求しつつ一歩前進したのである。

ちなみに赤軍派の前段階蜂起論についていえば、我々はまず❶党の組織する計画としての蜂起は権力奪取である。❷自然発生的な蜂起はありうるが、革命党はこの場合その闘いの先頭に立って闘いつつ計画され組織された蜂起へとケン引するべく革命的敗北主義を貫くことのみを任務とするのであり、自然発生的な蜂起を前提にして組織活動の中心を定めることはできない。❸だから蜂起は、何よりも帝国主義軍隊をはじめとするブルジョア国家権力機構の破壊・粉砕であり、その破壊と粉砕の中からプロレタリア権力機関をソビエトとして作り上げることである。❹赤軍派の政府中枢武装占拠＝蜂起という主張は「占拠」という現在の政府打倒闘争への過渡における大衆闘争の自然発生的（民主主義的）な要求に拝跪し、この延長上に蜂起を主張することによってこの階級闘争の過渡的な段階を恒常的武装闘争から武装総決起→内戦→蜂起として、権力奪取へ向けて計画的に組織していく任務を放棄したところの日和見主義であり、クーデター革命論である。❺国際根拠地論はクーデター革命論の国際版であり、ソ連軍による東欧人民主主義革命の引き写しでしかない。我々は帝国主義軍隊との長期の対峙に耐えうる陣型を、帝国主義をヘゲモニーなき侵略・反革命戦争へと追い込んでゆく中で構築していくのであり、蜂起＝権力奪取を媒介にした世界革命戦争の本格的な展開を勝ちとっていくのである。

総括の第三は、この恒常的武装闘争から内戦—世界革命戦争を闘い抜く革命党の飛躍の問題である。レーニン「何をなすべきか」の組織論が、全人民的武装蜂起を組織しうるところの計画としての党建設として、全国政治新聞と職業革命家を中軸とした中央集権党の組織論であったごとく・恒常的武装闘争から内戦—世界革命戦争を組織しうるところの計画としての党建設は全国政治新聞と職業革命家と固く結合して、党直制の軍団を組織することを中軸とした中央集権党の建設でなくてはならない。一〇・二一以後の正規軍—反帝戦線の建設の提起はそのようなものであり、われわれは臨戦体制的にせよこの構造を作り上げることによって、正規軍を正規軍たらしめることができたのである。地区軍団、戦闘団として議論された問題は、党細胞の問題であり、新たに結成されるべき共青の問題である。すなわち、中央軍—地方軍などとして、革命党から分離した軍隊を形成することは、われわれが国家権力を掌握していない限り不可能であり、現在の段階でのそのような軍建設は、必ず一人歩きし、クーデター革命、フィシストの軍隊に転落してゆく。問題は正規軍を組織し、全人民の武装を促進してゆくところの党細胞、共青なのであり、大衆闘争の組織化のみでなく、革命戦争の基本的組織化の単位を荷うものとして、党細胞、新たな共青が建設されるべきことにある。

総括の第四は、反帝戦線の建設と全共闘運動の問題である。10—11月闘争において、意識的大衆としての役割しか果しえなかった全共闘は、大学拠点のロックアウトが続く中で、再編が迫られている。京大パルチザン＝共同労働団は、ノンセクトラディカルの自己否定運動の論理を帝大解体—反大学からさらに押し進めたところであらわれた。すなわち、精神労働と肉体労働の分離を共同労働によって解決し、共同生活の中で勝ちとられる組織的団結の上に立って蜂起—ソビエト運動を目指すとするのだけれども共同労働—共同生活自体は現実の資本制分業を何ら廃絶するものでないことは自明であり、問題は共産主義（分業の廃絶・自己目的としての労働）にむかって、どのような質の労働を組織していくかの内実として革命党に問われ、党—軍—統一戦線の組織論として問われるのであり、一たん党を否定して下から問題をたてた場合、アナーキズム、人間主義へと転落してゆかざるをえないのである。反帝戦線はこのような全共闘の限界をこえて、その再武装と再編を革命党とその軍隊との結合によってはかっていく、大衆的に開かれた集団であり、武装と戦争と政府問題として煮つまっている現在の大衆闘争の次元における権力、日共との党派闘争に勝利することによって大衆を組織していくのである。「帝国主義の侵略・反革命を世界革命戦争へ！」「自衛隊解体！機動隊せん滅！」「自民党政府打倒」「全人民の武装」その他のスローガンと行動綱領にもとずいて、反帝戦線は恒常的武装闘争へと大衆を組織していくことができる。実際大衆闘争の水準は政府打倒闘争への過渡を進んでおり、小西三曹の登場と行動委員会結成その他によって明らかなのである。

### 党の飛躍、新たな共青、反帝戦線

さて社学同の組織総括の側からいうならば、10—11月闘争を契機として社学同の新たな共青への飛躍の作業は確実に前進している。先にも述べたように、正規軍—地区軍団・戦闘団—反帝戦線として議論されてきた問題は、結局新たな党細胞と特に共青の水準の問題である。党—軍—統一戦線としての我々の組織論は、この新たな党細胞の建設と共青の建設をめぐって、現在共産主義運動が真にいま現にある前提から出発し、現状を止揚していくところの現実の運動として自らを確立していくことに答えるものとしてある。すなわち現在の「労働者国家論」に対する我々の批判も、革マル派、中核派の如き、パリ・コンミューン四原則、マルクス「ゴータ綱領」をあてはめた批判のための批判ではなく、党—軍—統一戦線の相互関係と運動の内実批判として行うのであり、共産主義の建設に向けた国際的党派闘争として、党—軍—統一戦線による恒常的武装闘争の展開を位置ずけるのである。権力奪取、世界革命戦争、世界プロ独、社会主義は、共産主義へ至る諸段階として過渡なのであり、共産主義のみが党の目的であり、党は共産主義に至って完全に死滅する。我々が明らかにしなくてはならないのは、理想化した共産主義の規点、静的な諸段階の規定から「反帝、反スタ」を叫ぶことではなくて、「共産主義運動」として展開されている、国際的な諸潮流が現実の運動に対する（特にスターリン主義の）武器による批判としての共産主義運動の内実であり、そのようなものとして党—軍—統一戦線の構造を定めきることなのである。プロレタリアートの独裁は工場—地区—全国ソビエトを基本単位とする「労働の組織」を代表し、プロレタリアートの組織と規律を表現する。

資本主義における賃金奴隷制度にかわって、どのような労働の組織と規律を作り出すのかということがプロ独の基本問題である。一国におけるプロ独がそれ自体、世界革命戦争の機関として自らを維持し、国内におけるソビエト・コンミューン運動を貫徹しつつ国際的反革命と闘っていかなくてはならないこと、あるいは帝国主義列強の打倒を経てもなお、いかに共産主義を組織するかをめぐって、一国主義者、進歩主義者との内戦をも含む熾烈な闘争を世界的に組織しなくてはならないことをふまえるならば、世界党と世界赤軍の役割は決定的である。コンミューン・ソビエトが一国における権力奪取の安定に従って、労働の質に応じた分配を要求する労働組合に一部分は転化し、また他の一部分は、労働の量に応じた分配を基本とした国家機関に転化せざるをえないのに対して、党と赤軍が、大衆の最も先進的で、革命的な部分に依拠して、国家の「労働の量に応じた分配」の組織化を援助し、実現していくとともに、単にそれのみにとどまらず、国家による「労働の社会的組織化」そのものを越えた労働過程の変革を＝労働の組織と規律の形成、共産主義運動として行っていくことによって国家の死滅、プロレタリア階級そのものの死滅を目的意識的に促進していかなくてはならないのである。（必然の王国から自由の王国へ）党—軍—統一戦線の組織論は以上のような共産主義運動そのものを現在の恒常的武装闘争の段階にそって展開していくものとして、二四時間の党内生活の基準から、軍の規律と行動綱領・大衆闘争の宣伝・煽動の体系として構築されていかなければならないということである。

### 社学同の新たな共青への飛躍とは

現在、社学同が最も直面している組織問題は新たな共青への飛躍であり、革命戦争の基本単位を荷いうる党細胞と共青の建設が、24時間の党生活を要求し、単なる労学の結合でない以上、この共青の質をいかに作り上げるのかであるこのことは軍団建設と絶対に媒介にしつつも、共産主義青年同盟という名の通り、共産主義運動の実践としての質へと、現在の社学同、共青が飛躍しうるかどうかとしてあるのである。そしてこのような共青の結成は、当然これまでの党—フラクー統一戦線といった党と大衆の結合様式の中で形成されてきた党組織機構総体の変革と不可分であり、また党の若々しさみずみずしさ、その忍耐と自己犠牲、英雄的精神の基礎として結成されなくてはならないのであ。反帝戦線の組織化が内実を持つためには、共青の質を確定していくことが前提であり、そうでなければ共青は反帝戦線の単なる指導部に転落し、反帝戦線は従来の反帝学生戦線に軍事を接木したものになり産別の枠の突破も困難になるだろう。ML派の解放戦線路線や、赤軍派の革命戦線路線が、結局、従来のヘルメット部隊か、あるいはシンパ組織の域を越えることができないのは、彼等の革命党としての内実そのもの及び青年同盟の位置の不明確さにあり、彼等はまた反帝統一戦線の再編をも遂行することができないのである。

レーニンは「何をなすべきか」で主張した共産主義運動と労働運動の結合は、過渡期世界においてより発展したものとして、党—軍—統一戦線として実現されなくてはならない。60年代の八派＝革命的左翼が総体として克服することのできなかった。その自然成長性手工業性はこうして我々によってはっきりとまず克服されようとしており「党としての闘争」「党のための闘争」の基本構造を階級闘争に刻印する作業は前進しているのである。革マル派の諸君が、いかに「党」を語ろうとも、60年以降10年の階級闘争の試練の中から我々が建設しようとしている党とは全く無縁なのであり、彼等はすでに滅びゆく古い党派でしかないのである。共産同—社学同—共青は、世界史的な事業としての、この「党の革命」を断固として遂行し、60年代の八派＝革命的な質の再編をも勝ちとっていくであろう4・28沖縄闘争は、我々の以上の事業の前進にとって決定的なカナメであり、70年代階級闘争の構造を確定する上でも決定的である。社学同は新たな共青質を獲得していくことによって、4・28闘争の先頭に立ち、共産主義青年同盟へと飛躍すべき橋頭堡を形成しなくてはならない。

（おわり）

---

# 都・西部地区集会に二百

## 昨秋総括をまえ前進を開始

【都・西部分局】安保粉砕・沖縄闘争勝利・春闘勝利、西部地区労学決起集会は二月二六日、代々木区民会館に赤ヘルの労働者学生市民など二〇〇名を結集しておこなわれた。

この集会は、従来労働者と学生の運動の一体化が叫ばれつつもわが西部地区においてはそれが必ずしも充分とはいえなかったものを克服するため開催されたものであるが、準備期間の不足、雨天という悪条件にもかかわらず集会には地区集会としては画期的な結集をかちとり、各反戦組織及び各大学の闘争組織より鋭い問題提起と方向性の提起がなされ、今後の地区活動の展開のために大きな前進をかちとった。

集会は昨秋「安保決戦」で我々が切り拓いた闘争の質を更に飛躍させるための地区における労学統一した組織を追求しよう、という実行委員長のあいさつのあと、新宿反戦連合、渋谷地区反戦、中野反戦連合の各反戦組織から、反戦青年委員会活動の総括をふまえ、具体的な各闘争を労学地区共闘に組織し、更に全人民的政治闘争を担う全人民的政治組織を獲得しようと方針の提起がなされた。つづいて現在教師のレッドパージを、教師、生徒、それに地域の労働者人民を加えた闘争として闘っている「城右高校闘争に結集する会」からの闘争報告が行なわれ、更に昨年秋組合主義的団結をのり越えマッセンストを志向する赤ヘルを先頭とする政治ストライキを敢行し、訪米阻止を赤ヘル軍団で闘い一名が事後逮捕起訴され、現在春闘の中でレパ粉砕闘争を闘かおうとしているオリジン電気青行委からの闘う報告をうけた。

闘う学生組織からの報告は、まず、矮少な革マルとの鋭い党派闘争を闘う早大全学反帝戦線からの労学全国評議会へ大衆の政治的再編を貫徹せよ、という報告のあと日常的な右翼テロ、国家権力の攻撃と闘う日大全共闘経済医学部闘争委員会からの報告をうけた。更に上智大学全学反帝戦線、法政大学全共闘サークル闘争連合、そして国学院大の闘う学生からの報告があり、東洋大学第二工学部安保闘争委員会からは労学提携を具体的に追求し実践してきた総括から新たな問題を提起した。学生の報告の最後に入試阻止、三里塚闘争をはじめこの間のすべての闘争の先頭で闘っている明大全共闘和泉地区闘争委員会からの報告をうけた。

共産主義者同盟理論誌
共産主義
13号　残部僅少（文献堂のみ）